

研修報告

夕摩美術大学

高橋 幸彦

それぞれに山があり、川があり、海があり、木々があり、人が住む。それぞれの山であり、それぞれの川であり、それぞれの海であり、それぞれの木々である。一つとして全く同じものはない。川、山であり、川であり、海であり、木であり、地である。そして、そこに、人が住む。

「僕らは描かれた霧を見て、はじめて自然の霧というものを知る。ロンドンの霧を見ることでできるのはそこに霧があるからじゃないかと、霧を描いて見せてくれた画家がいだからなのだ」。オスカー・ワイルドの芸術論である。自分が敬愛する作品を生んでその地を見たい。いつの頃か、そのように思うようになった。

絵を描き始めてしばらくして、ある絵と出会った。ニコルソンの初期の絵である。あるなつかしさと共に親近感をおぼえた。極度に簡素化された風景である。英国風景そのものがこのようになのなのか、それともニコルソ

に自身かそのまうな主題を求めて風景に出会
たのかはその当時は知りえまうもなか。た
。1930年代の作品である。描写は空間と
いうよりは面を並置するかのまうなそれぞれ
の形がフラットにコンポジションされたしや
れてはいるかみる素朴さをもつ抽象化に向う
ことを暗示しているかのまうな作品である。
たが描き重ねるのかはなく、引かく、その
事を画面に残す、その速度感とするべきか。
筆触の柔らかさとのびやかさは妙なる対比をなし
た重層のマトリエールの構成はなんとおいえ
ぬおのわいをかもしだしていた。東京芸術大
学油画科2年に在学時に購入したニコルソンの
画集での出会いである。それ以来、自分の絵
の変転とはニコルソンの絵の好みの変化と重
なる。自分の作品が抽象に向うとニコルソンの
ホワイト・レリーフはたとえまうもたかく美
しいものとして写し始めた。フランスの作家
のものと、イタリアの作家のものと違
うあるおのびやかさの中にあるうらおいは日本の

しめりけをしのぼせる何かがある。幾何形態
ながら、まじしで、冷たさはそこにはない。
暖かみのある知的な構成は愛すべき作品であ
る。描くのははやく、彫るといふ技法を凝ら
、そこにかすかに見える行為のあとを光はう
つりすぎる。その中に見てとれる微妙な差は
障子のしに見える光を見るかのよ様な柔かな表
情をもちつ。

いつか、英国を見てみたい、感じてみたい
と思つた。その地を知りたいと思つた。ヘッ
ポワース、ヘンリー・ムーア、ウィクター・
パスモア、私の愛する作家の地である。

マティス、具象から抽象へをどりついで魅
力ある作家がある。作風の直截さとはうらは
らになかなかとつつまにくい面がある。ブッ
サンはその中では、たゞ、たゞすばらしいの
一言につまむ。構造のコンフォルスとは反対に
豊か味あいつませぬ表情をもちつ。木炭デ
ッサンによる滑らかな上に再び描くという絶え
間ない手直しと最終的な線にする素描は、奥

深く、単純化がいくえにも重なり合いつながら
 浮かび上がるさまはつさせぬ陰影をかもしび
 ます。生き生きとした線の中にかすかな光とあ
 いるつた不思議な画面は見ることをあきさせ
 ない。ここには白黒のモノクロームの世界な
 のだが、なぜかカラフルな色彩が見えてしま
 う。日本の水墨画のあの「墨は五彩を含む」と
 いうその言葉を感じます。色彩家マテッ
 スといわれた隠れた一面に私はひかれる。人
 からヴァン・ゴッホの礼拝堂のことを聞くまうには
 どのほうの項だろうか。1951年に完
 成させた晩年の傑作のことを。ここには、切
 り紙という手法からステンドグラスにみる表
 現は、シンポルな外見と最も美しく、最も非
 物質化した光を取り入れた表現は、現代美術
 の出発点がありそう。作品と場を体験するこ
 と、その地に立つこと。南仏の地、マテッス
 の最終的にたどりついたロザリオ礼拝堂。そ
 の地を感じることに。マテッスの線と色を内か
 ら知りたい。ああ、いいと思つた瞬間、ふい

につき放されるかのまうに感じてしまおうとっ
つぎにくさじ豊かさを外より見たいと。ニー
スの地、海、色、木、空気、風、人。

ドナルド・ツワツド。ミニマルアートの代
表的な作家である。金属やプラスチック等
の工業素材を用いた単純な幾何形態から成り
たつ作品展が、1991年1月から8月にか
けて埼玉県立近代美術館であつた。会場は展
覧会のため、再塗装をするなど準備を万端と
してのえて開催された。カタログ等の想像し感
じていた何かかそこには感じられなかつた。
こんなものか。いや、違う。どうしてだろう
という思いだけが残つた。その後、韓国の現
代美術館における作品を見る機会にめぐられ
た。その広大な空間における作品は、豊かだ
いづくせぬ体験を私にもたらした。作品を
見ることにまり空間と場と光を意識すること
かできた。ミニマルさの中にある極めて純粹
な世界を体験することかできた。見ることに
まり世界が立ち現われる。空間が場が大事だ

あるという作品と会場との関係もあらためて強く感じた。では、西欧での展覧会がほほのまうに見えるのだろうか。見てみたい、いつか強く思わがらえなかつた。今年の3月、ドナルド・ツァツトの大回顧展のカタログを手に入れることができた。テート・モダンで現在(2月から4月にかけて)開催されていること知った。それから、6月から9月にかけてドイツ、デュッセルドルフの州立美術館に巡回することか記されている。これにあわせて、8月27日、日本を出發することに決めた。ツンブルと豊かさの同居する世界。純化と豊かさ。見ることを問う。

ケルズの書、キリストの頭文字XP Iのページと芸術新潮のページで出会った衝撃は忘れられない。ケルト文様でふんばんに装飾され、文字が読まれる記号から見られるイメージに変貌しているそれは、美しくそして驚きだ。めくるめく迷路なから、整然とした文様は福音書のページであること以上の

何かと思えた。この造形的強さはどこからくるのだろうか。アイルランド、ケルス修道院の完成されたものと知るのは、最近になってのことだ。このケルト文様の連続と無限に増殖する形は、抽象的な文様であるにもかかわらず、生き物の春の虫さを感じさせる得体的な知れなさは、どこからくるのだろうか。ケルト、アイルランド、英国の隣国、見て確かめたい。日本の縄文土器に似た生命力。ヨーロッパといわれる美術とは異質に感じさせるもの。しかし、妙に親近感をおぼえぬのはなぜか。ヨーロッパ西端の異国、アイルランド。一度は行ってみたい。



ベン・ニコルソン
1980年 ウェストドリー
油彩、鉛筆/板

1992年 9月30日-10月1日
にかけて、小田急美術館にて
開催されたベン・ニコルソン展にて
見る事ができます。

この、大きくて、何かがよく、
引かかという彫る技法での
重層のマテリアルの構造は
板という硬い支持体の
上での表現の事で、美し
く見えたり。



マテウス

木炭でツツサシにまる女性モデル。
 何處を掃き直せばに形かその子一つの
 詞子にのみ、光の陰影を知らずは
 一つも画師かつた。
 限りの色氣を逆に思い浮かべてみる。



ケルススの書

キリストの頭文字XPI
 カブリン大学トリニティカレッジ図書館にある。
 無限の増殖の構造を持つ渦巻の様に
 生命力は満ち溢れている。とても美しい。



デュッセルドルフ

ノルトライン・ヴェストファーレン
 州立美術館

トナリ、ツツサシ

内部にての撮影を禁止されている
 ため、出口より許可にての
 撮影にての。

特に具に近代美術館と
 おけるその形、場（展覧会場）と
 作品の関係は改めてみる
 方には見えた。

見ることに利用空間からみる
 ための術といえぬ時間を
 過ごすことかかると。

ニース

空より、豊かな陽光の降りそそぐ地中海を
 目にしながら、ニース、コートダジュール空
 港に着いた。紺碧の海に沿った遊歩道プロム
 ナード・デ・ガンガレの高級ホテルを崩り、
 市街地にあるホテルに入った。

それぞれの家が自分を主張するかのよう
 に限りない色の餐宴をくりひろげている。個を
 主張することが自然の限りない生の豊かさ
 と和するかのようだ。海のまぶしさは空のさ
 やかさとは対になり、個をきわめさせる。個は
 ここでは声高にはっきりと自分を主張する。
 それは、生への自然への信頼のなせるわざ
 のほうろ。環境に埋没することは、ここ
 では許されまい。そのように個を主張する
 こと、混乱を生みださず、ここには豊かさを
 生んでいる。あたりまえのよう、この地
 の人は自分をそのまま主張する。それ
 が、ここには和することだ。色は光り輝き歌う。

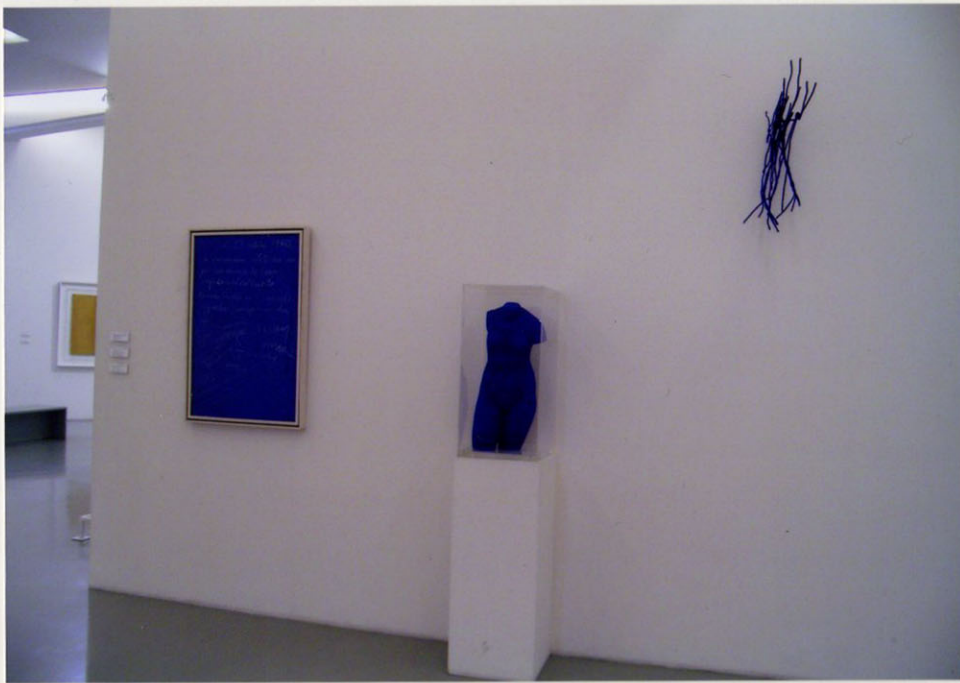
マニス、デュフ、ツァーガル、ニコラ

ド・スタールといつた画家がこの地を好みそ
して住み多くの作品を完成させている。住の
悦樂がここにはある。人が自然の一部である
ことか何の不思議でも無い。自然の延長に人
がいる。この地があらうとせうであるであら
うか。人は自然と和す。

この地、ニースでは自分を表現させるこ
とか和すことだ。



ニースの街の建物
とにか、それぞれの建物が、
それぞれの色をきつ合っているかのようだ。
であるから、全体はそれぞれを引寄せ
あいつから、自己主張しているかのよう
にやさかた。
すなわち何をきき合っているかに
感じだ。



ニース近代・現代美術館
 ニースの画家
 イヴ・クラインの作品
 画家自ら名付けた IKB (インター
 ナショナル・クラインブルー) は
 まさにこの地のコート・ダジュールの海
 の色を思わせる。
 なかなか深く沈み込んで何とも言えない
 色の豊かさ。



ニースの街の建物の窓
 それぞれのそれぞれの高さと
 うねうねのようさ。それについて
 何ら雑感としてどこか
 ある種の秩序がこの街にはある。
 一つ一つの色がお互に和すかの
 ようさ。



メンタス美術館
 鮮やかな赤の外壁と
 柔らかなオークルのバルコニー
 や窓枠の調和はあの頃の
 風景に似て優雅な感じが
 見せている。

ロザリオ礼拝堂

白いタイル張りの床の上にステンドグラスから差し込む光が、濃い青、濃い緑、レモニーエローの三色を床に映し、ゆらいでいた。ユートダツコールの海を思わせるブルー。そして地中海の木々の色、緑色、そしてレモニーエロー、それは南仏の光そのものである。光は柔かく床を踊る。正面右側には白いタイル壁の上に修道衣を身にまとった聖ドミニクスが描かれている。白と黒のけの世界のこのシンプルな表現は心の内側の豊かな結晶となる。空、木々、海、光の本質がかわりかたず交響曲を目にするここのびるたまうに思える。簡素さと豪華さか、シンプルなことと豊かさか、なんの矛盾もなく同居する世界、まさしくマニエリスの心がある。この南仏の地ではじめて輝く色だ。この地があらぬはならぬ。光そのものが表現たりえる。空の自由は調和して舞っている。



ロサリオ礼拝堂入口

1948年から1951年、3年止かいて
マテイスがつくった礼拝堂は
こじんまりとした愛おしい建物である。

ユースからバスにてウンスまで行く。
そして歩くこと15分、ロサリオ礼拝堂にや。



ロサリオ礼拝堂壁面

内部はこの撮影はやはり
言わなければならない。
降り注ぐ光は白い壁を柔らかく
照らしている。木々の緑がほろりと輝き、
ここにはほろりと生そのおのの月影うつしている
かのように感じている。

デュッセルドルフ

ニースから空路、ミューンヘンをえてデュッセルドルフに着く。ここでは、色はみえられ、ものの最小限度の要素に立ち返ったかのごとく、シンプルで、軽やかさはない。生への躍動は内にみえむ。目へ外へではなく、内へと向う。ここには、原理と規則があり、生への内なるまなざし、内面への探求がある。

ニースとこれほどの差を感じるとは。思いもよらぬことではあるが、確かに場との関係において、環境との中で何事を生みだしてきていることを感じざるえない。

原色が使われているとしても、空にみ、木々の緑にも和さない。灰色とそれに対する自然の秩序の一端としてのその生の色があるかのようだ。内から生けてくる生の喜びではなく、境界と境界のぶつかり合いから生じる色だ。それは生の内なる秩序のあらわれであろう。外は内へと向い、内なる秩序が外なる秩序を生み出す。人は内へと向い、自分に問い、

そして答える。ここには余計な装飾は必要ない。心の抽象的理念の反映する外なる秩序があつた。機能性と合理性が余分なものをはきいていく。

ここには、心の秩序を反映している内なる形があらわれている。



ノルトライネ
ハンセア州美術館
6月19日~9月5日にかけて
「マルセル・ヴァーデルフ展」が
開催されている。
ニー・ス・マティス美術館と
比べれば、何の装飾もない
機能性を重視しているかの
ようなデザインをしている。
か、内部は変化に富み、
光があまりよく入り込まれる
よう工夫がなされていて
素晴らしい美術館であつた。
常設の展示も充実している。



セルドルフの街の建物
原色が使われていたとて
ニー・スのものとは違う。
全体にすっきりとした合理性が
形となつて美しさがかここには
あつた。



デュッセルドルフ 国鉄
特急列車と国鉄内巻示

色がほろい。
人工の色そのものが
感がある。ニースのほう
すなわち環境と和すかの
対比は対比的である。



デュッセルドルフの西約30km
の街の建物

デュッセルドルフの西約30km
の街にある小都市。
ここには現代美術が充実し
ているアプタイルの美術館がある。
その内容は充実している。
数々の作品が表現内容により
部屋わけされており、見やすいとい
われている。

ニースの街の色とは違う。

色一つひとつ、そのように
見えてしまう。そして、これは
装飾という自己主張が全く
ないからである。

たゞ、その機能性、合理性の
形とはまた別的美かここにはある。



ドナルド・ジャッド展

作品と会場との関係において、さまざまなる表情を示す。展示空間、いっしょにされる他の作品との関係において、そして、作品を鑑賞する側の視点の位置との関係において表情が一変する。特に抽象作品における場との関係は作品をほかするところを、まさにそのことにかかっているように思える。作家と共に、作品を展示する側の理解が、又、作品をもう一度生み出すことになる。このように展示されておかないといふことは断じてありえない。まさに、こうでなければならぬといふような場の設定が必要とされてくる。ここには作品を作ることに於いて、作家と共に参加することになる。そして、最後、鑑賞する者が作品の完成に立ち会う。その場で、いろいろ表情を発見することにおいて、作品を作ることにまさに参加してるといえる。

ジャッドの作品で「スタック」と呼ばれている作品を見てみよう。作品は厳しい論理に

従い、感情を排したやり方の配列されている。
。しかし、同田の環境に有機的に関係づけら
れておられる。作品は床から天井までの空間を
、出来るだけいっぱい使って展示されること
が望まれている。同田の空間との関係が重要
な意味をもつ。場が表現の一部として積極的
に取り込まれている。当然どこにもいいとい
うわけにはいかない厳しい要素が作品にある
。ツヤツヤの自身かぶさわしうと考えた空間に
あって作品が初めて成立する。ツヤツヤとさ
今、この展示が理想とするものかどうかはわ
からぬがとにかく美しい空間が作品と共にあ
った。余分なものかほおとられ、見ることを
純粹化されてくるかのような体験をした。場
が光かとも作品にとりこまれているさまは
、ツヤツヤな豊かさがある。



ノルトライン・
ウエスタールン美術館入口



ツヤツト自身語っている。
「作品を注意深く設置するには
莫大の時間と思考が必要である。
ほとんどの芸術家作品はそれまで
いくつかのものは設置されて決して
二度と動かす必要はない。」

今回の展覧会をこのように
感じているのである。ツヤツト自身
今、それは決りえようがないか
作品の鏡面を保つ為、
角が取れないよう、美術館員が
事前に注意していたのか
記憶に残っている。



それはとても私にとって、
すばらしい展覧会であった。
日本よりここからよりよい
会場であったことは疑いよう
がない。

セント・アイヴス

ロンドンより列車にて5時間かけてセント・アイヴスへと向う。乗客は一人減り、二人減りで、自分に乗っている車両にはついに私一人しかいなくなってしまう。次の車両には老夫婦のみ。まさに地の果てに向かっている感じかしてしまふ。なぜ、マン・ニコルソン、ハツポフース、ナウム・カホ等の芸術家を魅了したのか。着いてみるほどと思つた。青い海、南仏に比べれば、白人よりとまどむ空とを望む小高い丘に広がる街を見て納得した。風光明媚な土地に明るい太陽の降りそそぐさまはユースと共通するものがある。冬でも海流の影響で比較的温暖であると聞く。第一次世界大戦に入つて、混乱を避け、マン・ニコルソンやバーバウ・ハツポフースらがこの地を訪れて活動した。そして、彼らの影響をうけた芸術家達、セント・アイヴス派がこの地で制作した。まさに、ここには、ニコルソンの知的の抑制のまいた色か質がある。ポ、ワ

ウト・レリーフのあの白はまさしく住居の日
の当たる白い壁そのものにみえる。灰色の淡
い階調は歴史かつくりだした屋根。そして壁
に見られる色と質だ。

英国人は木を素材として使うことを好むま
うだ。ニコルソンはしてしかり、ハツプワ
ース、そして、訪れたテートの展示されていた
ケイト・ナッツェのそのまうに見える。木
のつやさしさを好んだのたろう。ニコルソ
ンのほのかに木の質が、下からにしみかて感
いられるまうなテリケートの具との重層
構造をたつ。ナッツェは木をあまり加工せず
用いている。木そのものを女性、母にたぞら
えている。平和、そして愛を素材のある木か
ら感じるメッセージは、まさしく女性そのた
のを象徴しているかのまうだ。日本人と同様
に素材に対する感性、そして愛情を作品にに
おわせている。又、セント・アイヴス派と呼
ばれた作家達は素材を、複数の素材をうまく
生かして、それを対比させ、それそれぞれの言葉

と語らせ、一つのハ一モ二一モ生みだしてい
る。その言葉はドイツのまうに硬くはない、
フランスのまうに柔らかくはない。一つの中
庸をいくとこのえられた美しさだ。それは日
本の美と共通するところを私は感じる。協調、
そして調和、中庸である。

又、光と制作との関係を軽んずることほど
はない。同じ白い壁でも、この地の光と白の
おりなす様か、ニコルソン、ヘツポワースの
作品に感ぜずにははいられない。日々、生活し
、目にしている環境から自然の中にいみひてき
たものがある。この地にあつてつちかわれ
たものか、後々の作品に結晶化してあること
は間違いあるまい。美しい光だ。ささやかな
生をなせる光と空の色か。エースのあの生を
感じさせる光は、目を心として外へと向かせ
、このセント・アイヴスでは心の内に向かせ
る。ここでは、物事は良き秩序に落ち着く。



テート・モダンで
開催されていた「ナッツ」展
に展示されていたこの作品

切断された木の積み重ねられて
いるその規則性により一枚一枚の
個の形の変化が揃って。
一つの形を繰り返しているさまは、
生長する形を思わせる。

やさしく、それについてかざりかけられ、
それについて自分を主張している。
ほのぼのとした感じがしている。

木の歴史、自画像のようには
思える。

259 x 69 x 54 cm.

「撮影が大切です」ポスト・カードを購入した
ものである。



ハットワース美術館

庭にあるハットワースの作品。
金属に彩色をし、そこに
糸が張られている。

三つの要素が一つの形に結び
抽象からは、人間の一部分を
思いうかべている。

清涼感のある豊かな丸みは
美しく、庭の緑と和らいでいる。



セント・アイヴズ 湾

白の光には見える白は
 ニコルソニウホワイト・リーフ
 として、ハツフワースに木は彩色
 され白を思ひ浮かべている。
 海の青がここにはニースの空より
 さらめきは深い。



セント・アイヴズの街行並
 この茶から色はニコルソの
 色だ。そのまうは思つた。
 何だかすかといつてくすんが
 ちいさい程よい色だ。
 土色の灰色そのまうは
 呼ぶ名がみれはよい。



ハツフワース美術館

ハツフワース死後、
 自宅は美術館となった。
 ハツフワース自身、いろいろの
 素材を使いこなした。
 骨合の胎灯にやわらかい。
 それを作品として生きた。
 そのまうは壁のいれはみり
 目覚めはかきある。

テート・ブリテン

英国が1930年代までの国際的に交流が広がったものの、バン・ニコルソン、そして、ヘツポフース等のパリにての交流を通じて、ようやく世界の中の一國としての位置を得てきたことかよくわかる展示にめぐっていた。展示を見て、1930年代の作家が英国で重要視されていることかよく理解できた。その意味ではバン・ニコルソン、ヘツポフース、ヘンリー・ムーアは注目し得る作家といえる。そして、それにくわくウイリアム・パスカール。これらの作家は英国的特徴をまよくそなえた作家でもある。

バン・ニコルソン

ニコルソンの展示されていた作品はミロと共通するものがある。自動的な線の無意識の感性の表現、そして、人脈を思わせるフォルムと結びつけた抽象は英国的な中庸をえた落ち着いた上品さをかねそなえた作品である。曲線を使った形の構成がおもしろい。ここには

は良き秩序がある。又、絵の具を重ねることによって得られる重層の色の見え隠れするハ
 ーニニと鉛筆にて引かくことによつてえ
 られた。彫ることによる筆圧の差を画面に残
 すところは、日本の水墨の紙ににじむ差とポ
 ラスとマウス、陰と陽といつた共通項を感
 じる。このまうに幾重にもほりめくられ
 マテ、エールの重構造の一種工芸的な質に対
 する細やかな愛憎は日本に共通しているかの
 う。あらためて、日本にていろいろの形であ
 げいれられてきた要素を強く思う。

ヘンリー・ムーア

初期の石の直彫りの抽象的な形と人体の具
 象的な表現のせめぎ合いのあらしむさはムー
 アの真骨頂であろう。この時期はいろいろの
 質をもつ石を彫ることをも好んでやうだ。ムー
 アのストーン・ハンツにての体験からのち、
 彼の作品を方向づりをしてきたことわかれらの作
 品を見てよくわかる。一つの石の持つ個性
 を良く生かすことによつて形との対比、そし

と調和の中に独特な表情を生む。それは、石
 のもつモノユメニタルな要素とこのまざる
 心く見せたいという無意識な感性の方向づけ
 にまざるものであろう。石に対する畏敬は英国人
 のユメニタルからの伝統のあることか人ツブク
 ーエ同様見てとるこゝろがわかる。作るという
 その時に作家の思いの片が先行する説明はこ
 こには一つも見えてとれない。あくまで、石が
 主人公であるかのまうに、石と相談して、い
 や、石の思いを聞きせりながらこの形をつく
 りたせられたことかよくわかる。ここには後の抽
 象的な形へと向うのは自然であることか見て
 とれる。物との調和、自然との一体感、ここ
 に、日本と共通するものがある。それにして
 も良き秩序がある。説明しすむす、ある緊張
 感のある形の生成は自然か長い時間とかけて
 生み出す形を思い起こさせる。生命への畏敬
 、自然への回帰、ヘンリー・ムーアの原点の
 あらう。

ヴァクター・パスモア

パスモア・ニコルソン、ハツアワース等を
 セント・アイダスを訪ねたことに殆ど変化は著しい
 のがある。それまでの自然への写真からほ
 ぼ形へのスタイルが一変して幾何学的なレ
 リーフに彩色した抽象に一変する。ニコルソ
 ン。そしてハツアワースの作品を見て影響を
 うけたであろうことはよくわかる。又、ここ
 で英国人としての質に対する愛憎がある、たか
 らにその方向性に進んでであろうことわか
 る。ニコルソンのレリーフ的な抽象作品、
 そして、ハツアワースの木彫に糸を組み合わ
 せ、そして彩色した複数の素材を自分の作品に
 組み込む質に対する柔軟さを驚きと一つの啓
 示として受けとったであろうことか、ハスモア
 の作品の展開を見て感じることもできる。木
 をほることに基く形の構成、そして描くとい
 うことに基く形の構成のスタイルが美し
 さは英国的なものと言うこともできるであらう
 。ほの良さ、まとまり、緊張感、これは一つ
 と一つ、仏として独とは一線を画するもの

を見てとることもできるのである。素材を組み合わせることに伴う一つの調和である。これらの素材に対する感性、そしてレリーフ的なる作品の特徴は次期につながる作家にうけつられていくこともか見てとることもできるのである。ハミルトンの複数の素材を使いこなしながら、描くということの対比の中に調和を求めていく姿勢は画風の変わりとしてその間に空気が流れている。物がそれぞれ言葉を主張するのである。ところが一つの調和のなかにおさまる秩序は見事なものである。ここでは、キエーのマスウが見てとることもできるのである。英国的特質にあるものがある。あつたとしてそれらは作品の中に消化され同化してしまつてしまふに思える。日本が同じように根づかぬかつたのは同じ理由にあるものと考えられよう。異質なものは見すじされるか、形を変え、その国の中に同化されてしまふ、これはや原形をうかがい知ることもできなくなる。そのように思えるものか、パスモア、そしてニコルソン、

ハツポアース, ムーアに見えて来る。



1932年

Painting

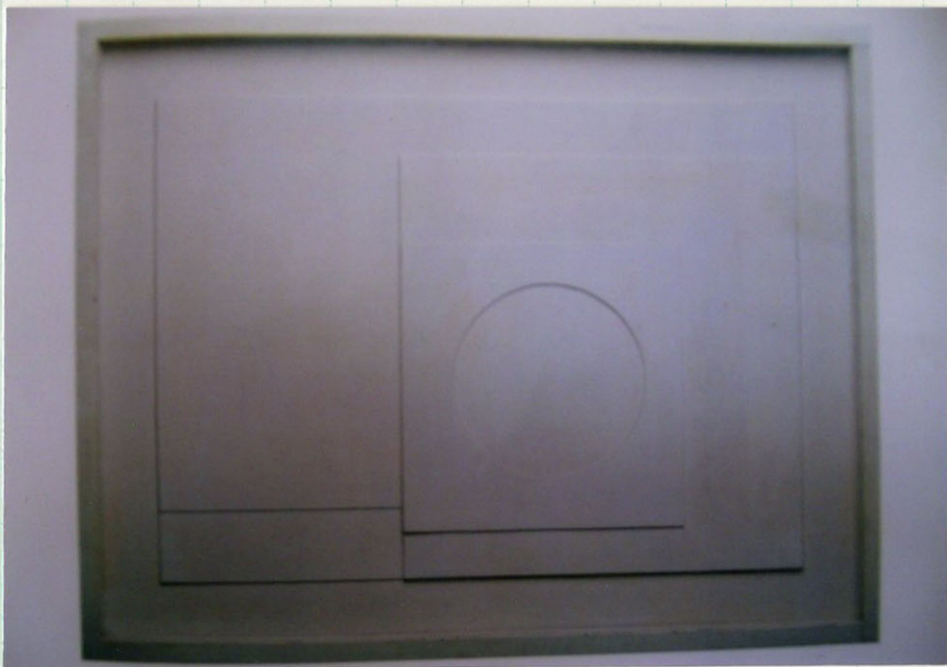
174 x 120 cm

油彩・鉛筆/キャンパス

この時期、絵の具を厚く塗りその上から鉛筆で引かくという技法の確立していた。人々の形と見えて来る。抽象的ながらも動きと見えて来る。

抽象と具象をいつか、分けていた。

館内では撮影禁止。カゲカゲ。



1936年

ホワイト・リーフ

油彩/板・リーフ

1992年

小田急美術館にて

ハル・ニコルソン展に出品された作品がある。

白の絵の具の下に木の色が見える。

又、何か全くの完全な形ではなく、手ごたえという跡が残る。

その二つの要素が絵に大きく引き込んでいる。

Modern British Art
L2 Rooms 18-31

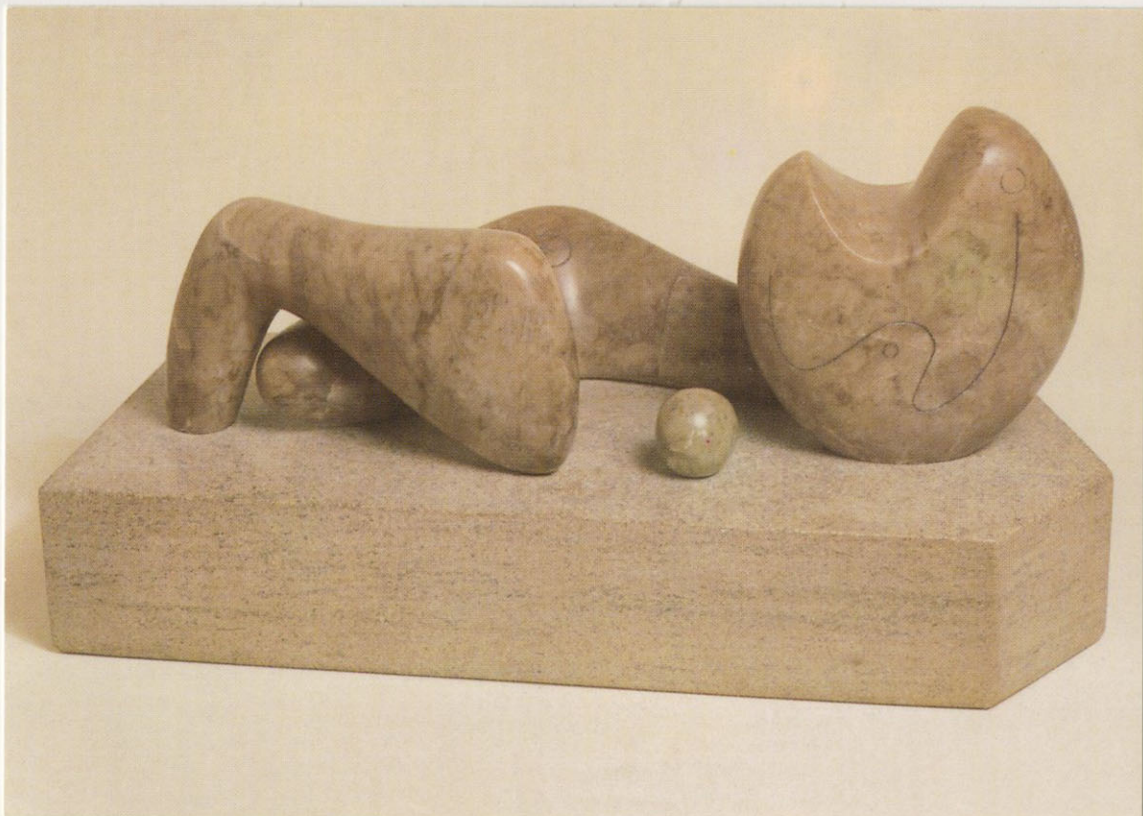


Rooms 18-31 present British art from 1900 to the present day. These include sculpture by Henry Moore and Barbara Hepworth, as well as work by contemporary artists. New displays include rooms devoted to Francis Bacon and Patrick Caulfield.

30.08

テート・ブリテンのハンフレット
このイブの展示されている。

エドワード・スコット 近代美術館前
ヘンリー・ムーアのイブ



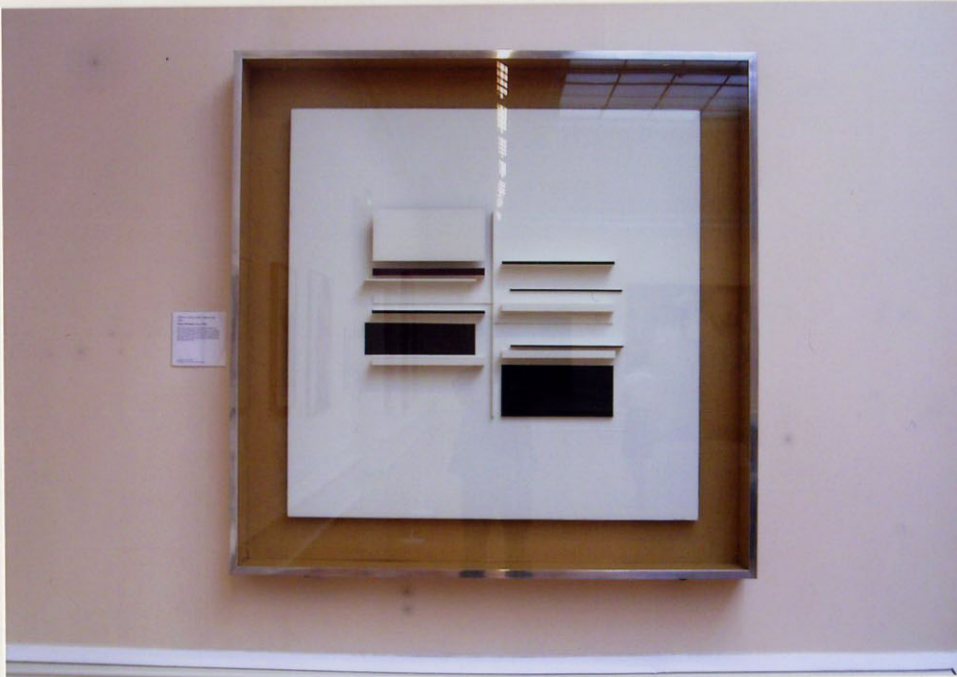
1934. ヘンリー・ムーア
女のコンポジション、17.5 x 46.7 x 20.3cm.
テート・モダン・ポスト・カートの



テト・マラリ - ハタロア

ヴィクター・ハスミア
「緑、紫、青、金の螺旋のモチーフ：内海の海岸」
油彩、パルハス 81.3 x 100.3 cm.

ニコルソン・ハツワースをセント・アイヴズに訪ねる
以前のイデオロ。



リハツホール・ウォーカー美術館にある

ヴィクター・ハスミアの作品。

複数の素材を使い、それに着色している。

矢口白の構成からニコルソンを訪ねた後の

影響をうかがい知ることになる。

テート・モダン

エルワース・ケリーの作品がマティスの作
 品と並ぶ部屋がある。一つの壁面に一枚づつ
 ・間かここには重要な意味をもち、あじりの
 空間かそして他の作家との結びつきか、一つ
 の要素となり、それぞれお互いにひきあひ
 い、結びつき部屋とたいか一つの主張として
 物を言っている。ケリーがマティスの影響を
 うけたことはよく知られている。ものゝ形の
 描写から抽象化する。単純化することにより
 一つのシンボリックな色面にとりついたりケリー
 の全くの抽象作品との組み合わせは、一つの
 歴史であり、又、一つの物語たりえよう。そ
 のかむしむすおむしらすか流れか部屋に在て
 まい、あいか知しむから引きあひ、一つの思
 いを部屋か主張している。ここには展示する
 側の理解と思い入れか作品の一つの要素とし
 てよくからみあっている。作家のみにて作
 品は在るが、これを理解し愛し、その形を
 展示という形の互みあひたむのかここには

ある。このまうな形があれを提示するとは一
 つの主張であり、そこには一つの原理が存在
 しなければならぬ。ここには、このまうな形
 がということが作者の思いと一つにたがった野
 、初めて、そこには作品が存在する。何とケリ
 一の作品が美しく生きて見えることか。何と
 マチイスの作品が普段とは違った一面、具象
 性よりも抽象性としてのおもしろさか、マチ
 イスの意図したこのまうなことの延長線上にこ
 のケリ一との幸福な出会いがあるか、ここを
 言いつづけるのはあるまい。ここには、時代を
 こえて共通の思いがこの出会いを実現させた
 のがある。

美術館とはこれほどその特色があるもの
 かと思う。見る側とは美術館サウスの者か、
 最初はこのまうな作品を思い、そして、作家
 をこのまうにとらえているかということを一
 目で理解できるまうにすることである。一
 点、一点の作品の質の良さもあるか、それ
 と同時に美術館の考えか、生き生きと見る側

に伝えられるかということがある。けれどだけ
 作品を理解し、愛しているかということなの
 だろう。だが、名と作品がそろえばそれだけ
 ではない。影にとう一人の作家を必要とする
 。すばらしい美術館がある。

シン・ン・スカリ

複数のパネルに水平線の縞状の形が描かれて
 いる。複数があることか、そこにハートな
 エッジの形の含まれて描く形をそのまゝ見せ
 るそのものとして変化をなみかしていた。
 単数であれば、筆触の形のみでその形そのもの
 のに流されてしまうだろう。建物の窓からみ
 るといった感じとしてもうまい対比がある。ハ
 ートとソフト。硬と軟。まさにそこに両極があ
 る。豪快に塗ったその筆のかたちそのものか
 スカリの心の状態そのものの動きを表わして
 いるのだろう。豪快さの中にいろいろな表情
 一せん細さ、やさしさを含む。一気に描くそ
 のまゝはまさに心の吐露だ。単純なシン・ン
 形くり返しは英国の家屋の様式からくる

のであろうか、その形をかりて異次元の世界に踏みこんでいる。ツインプルであればあるほど形が見え隠れしなから、いつのまにか視界からぬげおちてしまうかのまうにあらあらしいブラツツユの形のみが目にはせまり、一つの新たな世界の見えてくる。そのさまは油彩で描く水墨画のまうにも見えてきた。油彩の描いた水墨画—その美しさだ。



タミ・マツダ

かたつむり 1963

ツワツツユ・紙

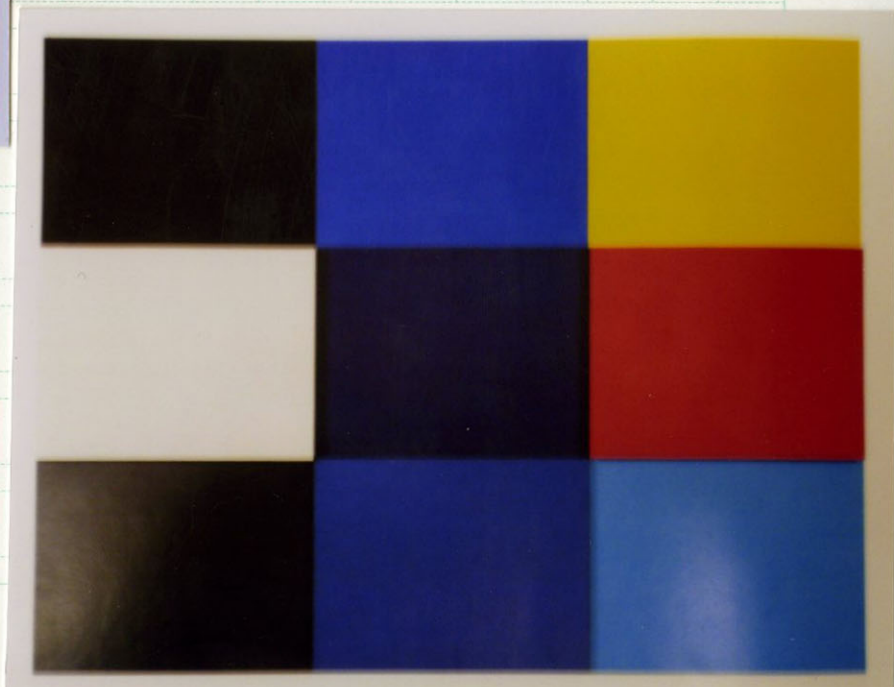
287.0 x 288.0 cm

(画集より)

抽象があり、具象がとある世界。

この2枚の作品が

対ひみるかのように展示されている。



エルワース・ケリー

1952.

油彩/板

9枚のハコ

150.5 x 193.8 cm

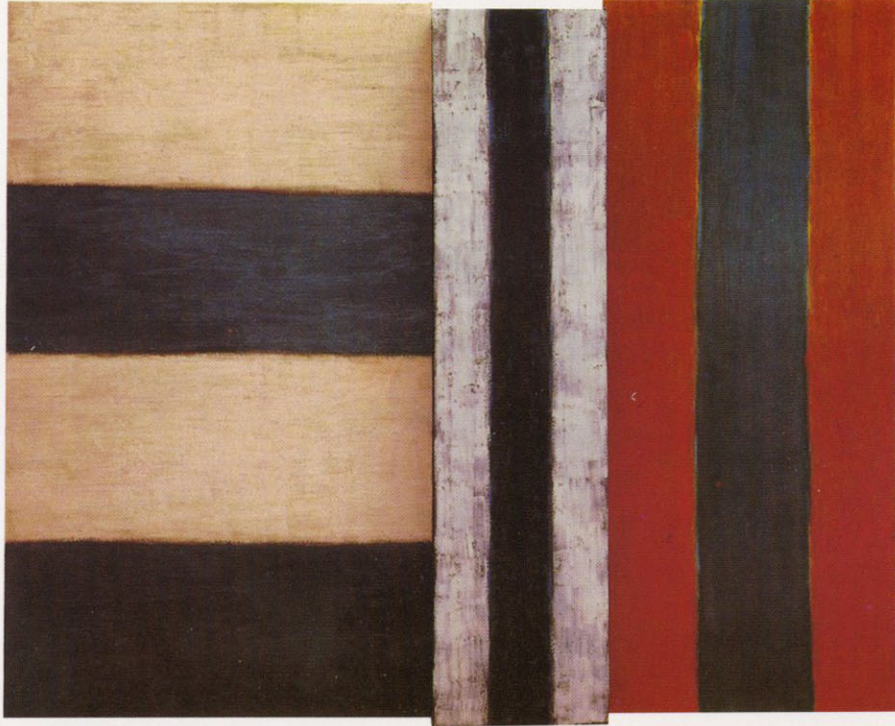
画集より

全くの色面による抽象のあり

か、ケリー-の作品はマツダの

影響が見てとれる。

(画集より)



テト・モリス
の「セント・マーク」

バーネット・スカリ
ホール 1954
油系、3枚のキャンバス

この作品は宗教画の伝統の中に
位置づけられている。
トリプティックである。
「抽象のわれわれは時代の芸術である。
...私はこれはわれわれ時代の神聖な芸術の比喩」
に語っている。



イースターのロウス?

この建物の形とスカリの作品、前者の形の美しさ、
より美しい建物である。

ケルズの書

空間が生きた物のまうにめくるめく変幻しな
 から理めつくされる細紐文様はヨーロッパと
 呼ばれているものとは全く異質なものを感
 させてくれる。私自身なぜ、ニコルソン等に
 ひかれ、マテイスにとつつきにくさを感じる
 のか理解できぬままだった。アイルランドの
 ケルト文化に触れ見えてきたものは、もう一
 つの要素、ヘルニスムでもなく、ヘアリスム
 がもなくケルトであると納得した。マテイス
 のとつつきにくさは西洋そのものだろう。そ
 して、ここには東洋、西洋という図式があて
 はまらぬ何かがある。むしろ、西洋と東洋が
 重なり合う部分が見える。懐しくもその生命
 力に共感をおぼえる文様の装飾をこえた造形
 として立ち現われていた。生命がそのまゝ形
 になつたものと言えよう。西洋と東洋の共通
 項。まさにここにある。アイルランドに感
 じていた懐しさの正体なのだろう。ケルト文化
 。そして、それは、さかのぼる巨石の文化。

そこには、やはり東洋と西洋があるまい。 —
 つの世界が立ち現われてくる。



カーネフ (英国)
 ウェールズ国立博物館 &
 美術館

ケルト十字架
 ここにはやはりケルト文化の
 目には文様がある。
 石造物が並んでいる様子も
 見える。
 ケルト文化である。



ケルト十字架
 ウォーターフォードの教会のそばにある。
 (マウルラント)

風雨にさらされている石造物の
 存在感は矢張り巨石文化の
 つよがちなものがあるのだろう。
 渦巻文様の自己増殖を無限に
 くり返す形をひたすら石かきである
 存在感は一つの信仰と結びついている。
 この形はたいてい単にヨーロッパの
 とはわりきれない。